

ホテルのニュースレター

日本ホテルの会 2002/7 第22号

ホテルの生態系再考が原点

日本ホテルの会会長 矢島 稔

この広い世界には考えられないような生きものがいたり、現象がある。それが珍しい程伝えられ好奇心をあおって時には事実とかけ離れたものになっている事があった。

しかし今やIT革命による情報の共有化は時と共に進展し、映像とコメントによる伝達は目を見張るばかりである。

こうした日常を過ごしているために媒体による認識は10年前には考えられない程市民の中にひろまり、そのレベルも高くなっていると思う。かつての好奇心はもはや今の子供たちには信じられない幼稚なものに思えるに違いない。ところが好奇心そのものがなくなったわけではなく変質しているのではないだろうか。日本人には珍しいもの好きで人が見たものは自分も見たい欲求にかられ、その衝動をおさえられない事が多いのではないだろうか。

長い間動物園のスタッフであった私の体験がそれを忘れがたいものにしている。中国から来たパンダに長蛇の列が出来、年間1,100万人が入園した。これ程ではないがコアラもラッコも入場整理にどれ程苦労したか。

今ではパンダが目の前にいても殆ど立ち

止まらない。すべては一過性の騒ぎであった。

つまり目玉になるものが必要で、にぎわうお祭りを好む人が多いといえるのかも知れない。毎年ニュースになるものに上野の山の花見があって、これはごく一部の人の限られた現象と思いたい。しかしどの地域にも四季それぞれの話題になる目玉があって観光による振興に心をくだしている事実も否定できない。

幸か不幸か発光する甲虫：ホテルは古くから日本人の心をとらえ、初夏には無くてはならぬ対象である。闇夜に光って乱舞する様は心に浸みわたり、あらゆる分野でテーマにされてきた。それはデリケートな発光のリズムを感性で受けとめる日本人らしい特徴といえるだろう。

ところがこうしてホテルが発生していた環境が人口増加にともなって宅地になり川は下水化され、人間の快適な生活を実現するためにあらゆる方法で自然はこわされていった。

50年以上前の都市とその生活を知る者にとってはもはや比べようもない事実である。

このホテルの会を創ろうと志を立てた時

私の心にあったのは生きもののすみかを確保し、どこ迄が限界なのか、どういう方法で共生が可能かを探ろうとしたことである。

ホタルを沢山出そうとか、それだけを人工的に守ることは不可能だという事を一人でも多くの人に知ってもらいたいという事であった。

1944年に発表された溪流棲昆虫の生態(可児藤吉)に感激し、動物の生態(宮地伝三郎・森主一)をテキストにしてフィールドワークを始めた私の原点はあくまで自然界の構成と生態系の解明であった。そして師とのめぐり合いで啓蒙を目的とする昆虫園を創設する機会を与えられ、昆虫や小動物の生態を中心に身近な自然界の仕組みを市民に説き、小さな生命を支えている要因をその種といっしょに考えてもらう事に努めてきたつもりである。

この日本ホタルの会も、日本人が大好きなホタルを環境の結晶として、とらえてもらいたいためのものである。しかし研究は進み大きな成果をあげているが、市民が街で行っているイベントを見ても受ける質問も殆どホタルを一匹でも多く出したいし見せたいというレベルにとどまっている。

なぜだろう、美しく光る故にホタルは観光資源にされ、目玉として人集めに使わ

れている。こういう事をくりかえしていたらやがてホタルは減少し、その生息環境にも関心をもたない人達が多くなってしまう。

昆虫や小さな生きものを対象に調べている者はそれが生存している事のすばらしさと一つ間違えば消えてしまう恐ろしさを分かりやすく市民に伝える義務がある。それも直ちに実物を通して説かなければ分かってくれない。

人間だけを尺度にした考えの間違いに気づかずにピオトープのミニチュアを造ることが自然との共生とったり、見た目だけの快い環境が小動物には生きていけない場所になってしまう事を早く分かってもらう努力をすべきだと会員の皆さんに訴えたい。

工業技術の発達の数合わせがこれ程速くなっている今、人は日常生活でそれを駆使するために追われ、小さな頃から野山を歩き生きものに接する時間がどんどん少なくなっているように思う。

こうした体験が自然観を変えつつあるのではないだろうか。まだまだ生きものについて分からない事は山ほどあるのに、それにすら関心をもたない人達がふえたらバーチャル世界の中で人は息ができなくなるのではないかと私は心配でならない。

今回の観察会において「かわさき自然調査団」の方から「川崎市青少年科学館紀要 第13号」を寄贈して頂きました。

内容は、川崎市や生田緑地での昆虫病原菌の記録や、ゲンジボタル、クモ、蛾、ハチ目、キジラミ、ミバエ・ハナアブ、アミメカゲロウ類、セセリチョウ、ヒゲコガネの採集・調査報告の他に、圏央道建設工事と、これに伴う遺跡発掘調査の過程で明らかになった秋留台地の埋積谷についての報告や、生田緑地の雑木林について、いつ頃から雑木林だったのか、その前の植生はどうだったのか、そして、人間生活との関わりにおいて雑木林がどんな文化を生んできたのかという、雑木林と文化史についての興味深い報告が掲載されています。

韓国のホタル保護指定地第1号

6月28日、韓国の最西南端にある済州島において韓国ホタル研究会が主催するシンポジウムが開かれました。済州島は韓国のハワイといわれる程の観光地ですが、環境問題にも力をいれており下水道はほぼ完全に普及しています。

シンポジウムでは韓国で記載されたウンモンボタル、北朝鮮で記載されたパバリボタル、そして日本の対馬にいるツシマヒメボタルの関係について、これらは同じ種類であるとの見解や、日本と朝鮮半島にいるヘイケボタル、アキマドボタルの分布、生活史、遺伝的な調査の他、アジアにおけるホタルの観光資源化の動向の話題が上りました。

また、日本からは北九州ほたるの会、香月・黒川ほたるの会からの発表もありました。そして、7月20日には北九州市において「ホタルで結ぶ日韓交流」のタイトルでシ

ンポジウムが開催される予定です。

済州島でのシンポジウムの翌日は、西帰浦市エレ川河口においてホタル保護地の指定式が行われました。ここは韓国ホタル研究会が指定する最初のホタル保護地域となります。指定の碑には

ホタル保護地域
韓国ホタル研究会指定第1号
西帰浦市エレ川
2002. 6. 28
西帰浦市長
韓国ホタル研究会会長

と書いてあります。また、この碑の裏にはウンモンボタル、アキマドボタルの写真と解説が記されています。



シンポジウムの様子



済州島ホタル保護指定地の碑

本の紹介

「ほーほーホタル来い」 三石暉弥著、川辺書林、2002年6月6日発行、1600円

長野県を中心に全国1000余点からホタル狩りの唄を約300点を収録しています。また、資料編として、世界のホタル、ホタル前線、化身としてのホタル、竹取物語とホタルなどが掲載されています。

を保存する方法について紹介します。

『環境論』武蔵野美術大学出版局、2002年、55-90頁。

参考文献：渋江桂子「環境論における生態学」

生田緑地観察会

さる6月16日(土)、神奈川県川崎市の生田緑地にて観察会を開きました。生田緑地には、丘陵の尾根と谷戸の入り組んだ地形の中に青少年科学館、枳形城址などの人工的に整備された場所や、雑木林、湧水の見られる湿地などがあります。当日は、科学館において「かわさき自然調査団」の方々から神奈川県や生田緑地における生物調査の状況についてお話を伺った後、現場の観察に出向きました。スジグロボタルやクロマドボタルの他にヒメバチの産卵の様子なども観察できました。



生田緑地観察会の様子

談話会

9月上旬に昭和女子大学において談話会を開催致します。詳細については追ってお知らせ致します。

寄贈図書

次の出版物を寄贈して頂きました。この場をお借りしてお礼申し上げます。

「Firefly」第5号、韓国ホタル研究会(The Korean Society of Firefly)

「50選九州ホタルマップ」、国土交通省九州地方整備局九州技術事務所

「ホタルマップ」、昭島市(里川螢の方より)

ホタルのニュースレター 第22号 平成14年7月31日発行



日本ホタルの会
JAPAN FIREFLIES SOCIETY

編集 日本ホタルの会事務局
発行 矢島 稔
156-0041 東京都世田谷区大原2-17-6
ステーションプラザ代田橋410
(株)オーグラム内 日本ホタルの会事務局
TEL & FAX: 03-3328-7379
e-mail: KYW07337@nifty.ne.jp

印刷 システム印刷株式会社
191-0031 東京都日野市高幡454
TEL: 042-591-1411 FAX: 042-591-7701